

## 56 安中板倉藩の人口問題と対策

清水 英 一

江戸時代の人口は、元禄時代の約二千六百万から、幕末までの約百五十年間の増加が、僅か八十万人であった。

歴史人口学は、キリスト教禁教の為の「宗門改帳」の調査から、当時の人口動態を旨く説明している。私は先の総会に「安中藩の種痘事業」を出題して、その古文書を発掘して「安中市史」にまとめた、文化財調査委員会の業績を紹介したが、阪本委員の資料集積から、安中藩板倉侯が「間引き、子返し」の悪習を禁じ、貧民救済に勤めた治績と、人口動態について、興味ある示唆を得たので報告する。

マルサスは飢饉と食糧生産のバランスが、人口増減の究極のメカニズムであると説明したが、歴史人口学では、江戸時代の人口は飢饉の影響の他、しばしば麻疹、天然痘等の伝染病も人口減少の原因となった。しかし長い泰

平の結果生活が向上し、多少の地域差を持ちながら、江戸時代中後期の人口は、一定の水準を維持したのである。しかし、此の時代、都市経済と町人文化の向上に比べ、米生産が限られていた農民は、働けど働けど生活は楽にならず、こゝで生き抜く方法は「口減らし」しか無く、生命の危険を冒しての墮胎、新産児を圧殺する「間引き、子がえし」が横行した。

この間の人口動態には特異的な地方差があり、「宗門改帳」による各藩の人口は、北陸、四国、中国、九州等で増し、東北、特に北関東で減った。此の地は冷害に加え、浅間山の噴火等による飢饉に起因する事は勿論だが、歴史人口学によれば、「都市蟻地獄説」、同じ頃欧州でも「都市墓場説」に於て、大都市に流入した出稼人は、その生活環境の悪さの為早死し、又結婚難から子供を持たず、その補充の為に更に労働者が流入し、大都市周辺の農村に人口減、耕作放棄が生じたと言う。即ち江戸の労働力の空白を、北関東、東北の農村出稼人が埋めたのであり、同様の現象が京、大阪の周辺でも起きている。

その為上州の諸藩は、「間引き」の禁令や安産愛育の教

訓を広め、又農民は子育ての喜びを願ひ、間引きをやつて仏罰を受け、地獄に落ちる恐怖を避ける為、絵画を作り絵馬を奉納する等の例がある。此れは善悪ではなく、人口減による農村の衰退と米の生産減に、公民共に危機感があつた為であろう。現に歴史人口学の人口減少地帯と、阪本資料の中の「間引き絵馬・文書」の分布とが、奇しくも一致し、出産祝いの儀式が殊に丁寧であるとも言われる。

この時期、安中板倉藩は、「間引き」の悪習慣を防止し、子孫繁栄を計るため、養育奉行三人、掛り三人を任命し(北野寺文書)、奉行のうち藩儒山田三郎を領内に廻し、間引きは人倫に背く事を諭し、触書を発した。

一、大目付 山田三郎

右之者御領分村々廻村いたし一同之者江

教諭致候様被仰付候間可得其意候 以上

嘉永四丑四月一七日 安中役所

更に「刃土民間子孫繁盛手引草」を刊行配布して、「間引き」は地獄に墮る所業であると説き、その禁止に勤めた。当地では文政十二年、板鼻宿の国学者松本思斉が「養育

歌」を出版し、又新井村の学者巖井任重は、安政四年「御家手本、女今川」等の教訓書を残すなど、安中藩と沼田藩が特に熱心であつた。明治に入つても悪習は改まらず、新政府が農村に布告した戊辰七月の高札で、「間引き子がへしと申す事有之哉に相聞え不屈き至極候 生るる子ハ御国の民なり」と書いている。これは板倉勝明侯に始まる、安中藩の各種の善政の一端で、広く顕彰するに値する。又北関東の農村の人口減は、本邦の工業化に伴う経済発展を待つて、初めて其の終焉を迎えたのである。

(確氷安中医師会編集委員会)